

調査結果の分析・考察

調査の実態は下の表の通りである。

調査対象	回収数	有効回答数	回収率 (%)
児童	946	946	100
保護者	812	812	100
地域	83	83	100
教職員	40	40	100

◆防災・防災教育について

「防災についての興味・関心」の調査結果は、25年度生と24年度生の「とてもある」がおよそ50%と、23～20年度生のおよそ15%に比べて高い数値になっている。これは、23～20年度生の設問文が「防災（災害を防ぐためにじゅんぴすること）」であるのに対し、25・24年度生は「じしんやたいふうなどから」と具体例を明示してしまったため、25・24年度生の方がより明確なイメージをもって回答したためであると考えられる。これは、質問紙作成時に「下学年に防災という単語の意味は難しいであろう」という解釈で具体例を明示した方がよいと判断したが、実際は上学年でも「防災」という単語の解釈が難しかったことを意味すると考えられる。上学年においても下学年と同様の文章で調査すべきであったと反省している。

一方、23～20年度生において、関心が「あまりない」「まったくない」と回答している児童がおよそ30～40%程度存在している。これは設問文の解釈の問題ではなく、純粋に関心が低いことを意味すると考えられる。これらの児童に対して「防災安全科」で学ぶことを通して興味・関心を持てるように指導していくことが重要であると考えられる。

「災害や防災についての会話頻度」では、月1回程度におよそ20%、3か月に1回程度がおよそ30%、半年に1回がおよそ30%、まったくしないがおよそ20%という結果であった。この項目は保護者の調査結果と比較すると、保護者の方が月1回程度と3か月に1回程度がやや多いようにも見える。このことから、「保護者は意識して話をしていても、児童は意識していない、または防災に関する会話であると認識していない」ことを意味するものと思われる。これは、児童側に防災に関する知識が保護者に比べて少ないことで、認識が低くなっている可能性が考えられる。この傾向は、児童の「自分のことやおうちのことについて」の中にある項目（「停電に備えて、ろうそくや懐中電灯、電池やラジオなどを置いてある」「地震によって、食器が落ちたり家具が倒れたりしないように工夫している」など）でも同様であり、防災安全科での学びを通して、必要な知識を得ることで保護者と児童の認識の差を埋めていくことが命を守るための学習である防災安全科にとって重要ではないかと考える。

また、「小学校で防災教育を行うことは、生きる力を育む上で重要だと思う」という設問に対しては保護者・地域ともに「とてもそう思う」に80%、「少し思う」に20%が回答していることから、保護者・地域共に防災教育の重要性を十分感じていると言えられる。

さらに、「七郷小学校で防災安全科を時間割の中に設けて行うことは、本校の子どもた

ちにとって重要だと思う」という設問では、「とてもそう思う」が60%、「少し思う」が35%と分布の程度に若干の違いはあれど、95%が肯定的な回答をしていることから、時間割の中に設けることに関してもおおむね好意的に受け取っていると思われる。しかし、自由記述の中には「週の授業時間が1時間増えるのか、何かの教科が1つ減ってしまうのかが不明である」「重要だとは思いますが週に1時間も必要なのかは疑問だ」という旨の回答もあり、実施する際の説明が不十分であったことは否めない。今後、設置に関する内容について、保護者への十分な説明が必要であると思われる。

◆自分のことやおうちのこと、七郷小学校の子どもたちについて

地域と保護者の回答結果は、ほぼ同じように分布していた。

ライフラインが絶たれた時に生命を維持する知恵や工夫について（具体的には「いざというときに、子ども110番のお店や近くの大人に助けを求めることができる」「119番に電話した時に落ち着いて話すことができる」「登下校中に地震や雷にあった時、身を守るために子ども110番のお店に入るなど、安全に行動できる」「大きな地震などがあつたときに、避難するための場所を知っている」「軽い怪我なら一人で手当をすることができる」「電気ストーブやガスのファンヒーターなどが使えないときに体をあたためる方法を知っている」「包丁やナイフを使って野菜や肉を切ったり、魚をさばいたりすることができる」の7項目）では、保護者に比べて「とてもそう思う」「そう思う」と回答する児童が多く見られるが、これは「本当にできる」場合と「できると思っていたが、実はできていなかった」場合の2パターンが考えられる。実際は、大人である保護者の目から見た様子が本来の数値に近いものであると考えられることから、今後、防災安全科で学ぶことを通して保護者と児童の数値が近いものになっていくのではないかと考えている。

最後に、「七郷のまちや、これからの世の中が、こんなふうになってほしいという思いを持っている。」という設問では、「とてもそう思う」「そう思う」を合わせると保護者は40%前後であるのに対し、児童は70%前後と高くなっている。防災安全科を通して、将来への希望やビジョンを明確にすることで、保護者がその希望を知って地域・家庭が明るくなっていくことを期待したい。

◆教職員について

実践する教職員の調査では、「防災安全科の目的を理解しているか」「防災に関する研修を受けたい」の2項目では「とてもそう思う」「そう思う」を合わせると80%を超える数字になっている。一方で、「指導内容を理解している」「領域として行うのは有効である」では「あまり思わない」がおよそ40%を占める。今年度は、資質・能力の設定や単元構築についての研究で授業実践が少なかったため、指導内容の理解までは至らなかったためであると思われる。「開発・実践に自信がある」「開発・実践に満足感がある」について、およそ75%の職員が「あまり思わない」と回答している結果に現れていると考えられる。

次年度以降、指導内容を確認しながら授業実践を行うことを通して、指導者としての自信や満足感を得て、新設領域が子どもたちにとって有益なものにすることができるよう、研究開発活動に取り組んでいきたいと考える。